市長コラム87

至誠通天

藤井 勇治

※至誠通天
誠を尽くせば天が味方してくれること

災害に備える

先の台風5号は長浜市内にも大きな被害をおよぼしました。被害にあわれた皆様に心からお見舞いを申しあげます。

被害は、道路や農地、山林、住居や公共施設など、市内北部を中心に100か所以上におよび、浸水住宅の土砂撤去や消毒作業、流木の撤去などを順次行い、しっかりと復旧作業を進めています。

特に、姉川の越水については、直ちに滋賀県知事と面談し、越水の最大要因である切り通しの即時閉鎖と「湖北圏域河川整備計画」に基づく河川整備の早期着手など、河川管理者としての責任を果たしていただくよう強く要望いたしました。知事からは「切り通しの見直しや河川整備を前倒しして進めたい」と返答を得ることができ、9月16日に切り通しは閉鎖されました。引き続き地元自治会や県と連携しながら早急な対策を講じて参ります。

最近の突発的・局地的な豪雨を予測することは困難ですが、今回の教訓を活かし、雨量の監視や市民の皆さんへの情報提供方法、台風などによる水害発生をあらかじめ想定した時系列の事前行動計画「タイムライン」をまとめるなど、防災体制を充実し、強化しました。18日の未明に通過した台風18号では、先手先手の対応をし、防災体制で定めたタイムラインを確実に実行しました。また、地震災害の備えとして、今年も10月15日に地域の皆さん、消防、警察、自衛隊、医療機関、ライフライン関係機関など総勢800人の訓練である「長浜市総合防災訓練」を余呉地域で計画しています。

今回の台風5号のように、自然が時折見せるすさまじい威力は、人間の力をはるかに超えます。私は危機管理のトップとしての責務を果たすために防災体制の強化に全力をあげていきます。

▲台風5号通過後の姉川

市立病院通信-78-

お元気ですか

このコーナーでは、病院事業のスタッフの紹介を兼ねて、病院施設や体制のほか、生活に役立つ“健康豆知識”などを紹介します。

市立長浜病院循環器内科
診療局長 高島 弘行

本当に怖い閉塞性動脈硬化症

閉塞性動脈硬化症は、足の動脈に悪玉コレステロールや血栓が詰まって血流障害を起こす病気です。最近は日本でも増加して、糖尿病患者の1割弱、心臓・脳血管患者や透析患者では1～2割にのぼります。

初期症状は、歩くと足の筋肉が突っ張って痛み、休むとまた歩ける間歇性跛行です。進行すれば足に潰瘍ができて壊疽となり、安静時も足がじんじん痛んで足の切断や死に至ることもあります。

実際、足の動脈が詰まっている患者さんは、既に動脈硬化が全身におよんでおり、3年間で1割以上が心臓や脳血管障害を起こし、1年間の死亡率は約4％という恐ろしいデータが知られています。

喫煙（以前に吸っていた場合も）、高血圧、糖尿病、脂質異常、狭心症や心筋梗塞、脳梗塞の患者、またその血縁者は特に注意が必要です。

高齢者は日常歩く機会が減っているので、気づいたときにはいきなり重症化していることもあります。早期発見、早期治療があなたの未来を変えますので、気になることがあればいつでも循環器内科までお問い合わせ下さい。採血のほか、血圧脈波や超音波、造影CT、MRAなどで精密検査して、病気が見つかれば我々の得意とするカテーテル手術やバイパス手術、適切な薬でいち早く治療します。

問 市立長浜病院（☎68－2300〈代表〉）

シリーズ⑲

ながはまの文化財

雨森芳洲 特集

今秋の雨森芳洲関連資料のユネスコ「世界の記憶」登録に向けて、11月号までながはまの文化財のページで雨森芳洲の紹介をします。

▶雨森芳洲の肖像（芳洲会蔵）

国政に影響を与えた文化人

●新井白石との論争

雨森芳洲と新井白石は、ともに木下順庵のもとで学んだ仲ですが、のちに大論争を行いました。

白石は芳洲より11歳年長ですが順庵門下に入るのは芳洲より3年遅く、元禄6年（1693）、師の推挙により甲州の徳川綱豊（のち第六代将軍家宣）の儒者となりました。そして「正徳の治」の中心人物として中央政界で華々しく活躍しました。

正徳元年（1711）の第8次朝鮮通信使来日にあたって、当時、幕府の儒官だった白石は、「朝鮮国王に対して将軍は日本国大君を使っているが、大君は皇太子を指すことから、将軍も日本国王とすべきである」と主張しました。

これについて芳洲は、「皇族でないものが国王を称することは僭称（身分を越えた呼び方）にあたる」と主張し、激しい論争となりました。結果、白石の主張が通り、第8次朝鮮通信使の国書には日本国王を使用しましたが、白石が任を離れた次回の通信使より再び大君に戻されました。

また第8次朝鮮通信使は、通常江戸城で行う国書の交換が、国書の書き換えが必要となり差し戻しとなりました。帰路、対馬に戻ってやっと交換が行われました。国書の書き換えについては、芳洲が白石と通信使との折衝役として奮闘しました。その経緯は、「世界の記憶」登録申請リストに含まれる『国書書改惣論』につぶさに記録されています。

二人は、立場の違いでの論争は論争として、学者としての二人はその後も互いに評価しあい、芳洲は自らや息子の漢詩の批評を白石に仰ぐなど、尊敬しあいながら終生親友として交友を続けました。

●吉田松陰の芳洲評価

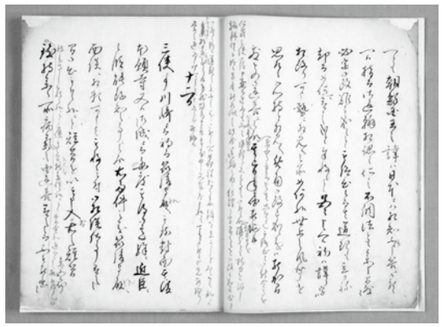
約100年後、明治維新の立役者であり「人づくりの名人」と称された長州・松下村塾の吉田松陰が『丁巳幽室文稿』の中で「雨森芳洲先生の国王称号論跋」を著し、芳洲を高く評価しています。

松陰は常々門弟たちに、「学は、人たる所以を学ぶなり」と語っていました。これは芳洲が好んで使った言葉で、晩年に書した「諭子弟語」や随筆『橘窓茶話』の冒頭にも記されています。学問の意義は、「人としてどう生きるか」「何をなすべきか」ということを学ぶことであるという意味です。

●生涯学習の先駆・芳洲

また芳洲は生涯学習の先駆者ともいえます。晩年になっても向学心は衰えず、80歳を過ぎてから和歌を志しました。

知人に宛てた手紙の中で芳洲は、「これまで儒学一筋の一生を過ごしてきた。和歌はまったく知識がない。「かな、けり、らん」の使い方や、「まくらことば」などもまったく知らない。そこで『古今和歌集』を1千遍読んで用法などを学び、その後に1万首作るという課題を自分に課した。80歳を過ぎて寿命のことを棚に上げた馬鹿げた話と人は笑うかもしれないが、自分は充分幸せだった。もうこれ以上何も望むところもなく、日本古来の文化である和歌を学びながら死を待つことも、また風流なことではないか」と書きつづっています。結局、古今和歌集の千遍読みは8か月ほどで完遂し、作った和歌は現在確認できるだけでも2万首におよびます。「六十の手習い」とはよく言いますが、「八十の手習い」を実践した芳洲。高齢化の現代においても、その姿勢は学ぶところが大きいのではないでしょうか。



▲国書書改惣論

問 長浜城歴史博物館（☎63－4611）